

## RICHARD BACH の住む世界

木名瀬 信也

*Jonathan Livingston Seagull* (1970)「カモメのジョナサン」で爆発的な成功を収めた RICHARD BACH (1936~) は、*A Gift of Wings* (1974) と *Illusions* (1977) を世に送り、昨年 (1979) *There's No Such Place As Far Away* を発表した。珠は掌中にあり、蓬萊山は眼前にあり、ということであろう。BACH の求めている世界、あるいは彼の想念の住む世界は「ジョナサン」の到達した世界と同じであるが、*There's No Such Place As Far Away* において彼が展開する a variation によって、その側面を覗いてみたい。

Rae から誕生日パーティーへの招待状が届いた。Bach は喜んで、数千マイルも離れている彼女のところへ、何はともあれ飛んで行こうと思いたった。Rae (Rachel の略) は別れた妻 Bette Franks との間に生れた娘のような気がしてならない。

彼の飛行の旅は鳥に乗って行く。最初はハチドリ (hummingbird)、昔 Rae が彼と一緒にアメリカ中西部の町で見た鳥である。彼はそのハチドリに、“Little Rae is growing up and I am going to her birthday party with a present.” と旅行の主旨を説明すると、ハチドリは首をかしげて、*going* ということが理解できないという。

ハチドリの次に乗った鳥はフクロウ。暗い夜空も飛びつづけるのだ。フクロウの家で乗り次ぐ時、ハチドリの残した言葉はどうも気にかかると。 “Can miles truly separate us from friends? If you want to be with Rae, aren't you already there?”

フクロウにも同じ説明をしたが、ハチドリに指摘された *going* が気

になっていた。しかしフクロウは友達を何故 *little* と呼ぶのか理解に苦しむという。

次はワシに乗るのだ。高い山を越えて行くからであるが、同じ説明に対してワシは、*birthday* という言葉がわからないという。Rae の生存が始まった時を祝うことは、その以前には Rae が存在しなかったからだ、時間の推移を説明しても、ワシは理解を示さず “A time before Rae’s life began? Don’t you think rather that it is Rae’s life that began before time ever was?” という。

暑い砂漠にやって来ると、次の出番はタカである。同じ説明をタカにもすると、広漠たる地上を眺めながら、タカは *growing up* がわからないという。来年は成人になると付け加えても、それが *growing* なのかね、と疑問を投げかけたまま、飛び去ってしまう。

砂漠を越えると海辺へ出る。海辺には Bach の友人・分身であるカモメがいる。砂漠から海辺へ彼を乗せて行った鳥はいない。きっと彼は自分の想念に乗って、一気にカモメと合流したのであろう。ここには「ジョナサン」が生き返って来て、Bach と親しげな会話を交している。総明なカモメはすべてを見通しなので、学びながら向上していることを示すように、注意深く言葉を選んで話しをした。“Why do you fly me to see Rae when you know in truth I am already with her?” これはハチドリに言われた問い、“Can miles truly separate us from friends? If you want to be with Rae, aren’t you already there?” を肯定した考えを基礎においている。

カモメは丘を越え、街を抜けて目的地 Rae の家へ彼を運び、彼の問いに答えて肝心なことは自分で真実を知ることだといい、まことの理解に達しない限りは、二次的な方法や、外部の助力によって、例へば飛行機や人間や鳥類であるが、その真実を示し得るに過ぎないと教え、さらに “Not being known doesn’t stop the truth from being true.” と

言って、真実の深さと広さを忘れてはならぬと、注意を残して飛び去ってしまった。

以上が前半であるが、後半は誕生日の贈り物が中心となって、この散文詩が展開される。Rae にいよいよ贈り物を手渡すことになるのであるが、ハチドリ・フクロウ・ワシ・タカがそれぞれ疑問を抱いた言葉、*going, little, birthday, growing up* を考えてみよう。

*going* は距離を暗示し、ハチドリは空間の距離を越えた世界に住んでいる。

*little* は *growing up* の初期の状態を示して、時間の経過を表現し、*birthday* は時間の流れの中の一時点を殊更に取り上げている。時間を越えた世界に住んでいるフクロウ・ワシ・タカにとっては、これらの言葉が理解できなかった。時間空間を超越したところに真実を位置づけている RICHARD BACH の東洋的な神祕主義が覗えると思う。

贈り物を手にして Rae に語りかける BACH は、愛情の深い父親に見えるが、父と子は一体にはなり得ない別人格であることを踏まえて、“You are not the child of the people you call mother and father” と言い、さらに “but their fellow-adventurer on a bright journey to understand the things that are.” と Rae を励ましているが、*the things that are* は真実のことであり、「ジョナサン」と Rae は同じ道を進むことになる。Rae に手渡される贈り物はどんなものであろうか。

It is a ring for you to wear. It sparkles with a special light and cannot be taken away by anyone; it cannot be destroyed.

You are the only one in all the world who can see the ring that I give you today, as I was the only one who could see it when it was mine.

Your ring gives you a new power.

Wearing it, you can lift yourself into the wings of all the birds

that fly—you can see through their golden eyes, you can touch the wind that sweeps through their velvet feather, you can know the joy of going way up high above the world and all its cares. You can stay as long as you want in the sky, past the night, through sunrise, and when you feel like coming down again, your questions will have answers and your worries will have gone.

As anything that cannot be touched with the hand or seen with the eye, your gift grows more powerful as you use it. At first you might use it only when you are outdoors, watching the bird with whom you fly. But later on, if you use it well, it will work with birds that you cannot see, and last of all you will find that you'll need neither ring nor bird to fly alone above the quiet of the clouds. And when that day comes to you, you must give your gift to someone who you know will use it well, and who can learn that the only things that matter are those made of truth and joy, and not of tin and glass.

娘に贈る指環は、贈り物としては月並かも知れぬが、普通の指環ではない、もちろん特別高価であるというでもない、なにか魔法を帯びた指環で、空中飛翔の力を与えてくれるものである。空を飛ぶことの喜びは、地上に舞い戻るとあらゆる疑問が解け、悩みが解消してしまうほどの力をもっている。ところがこの指環は、手で触れたり目で見たりできないようなもので、よく使いなれると目に見えない鳥と一緒に飛ぶことができ、ついには指環も用いず鳥の世話にならずとも、雲の峯の静寂の世界に一人で飛翔する境涯に達するようになる。このような日が到来したならば、「ジョナサン」では perfection と言っているが、その gift を誰か別の人で、使い方をよく心得、さらに *the things* を身につけうる人に、譲らなければならない。 *the things* は made of truth and joy,

and not of tin and glass である。

“And when that day comes to you, ~” と言う時、BACH は自分に *that day* は来たので、Rae に譲ろうとしていることを語っているのであり、娘に対する親の愛情がしみじみと感じられる。友達の贈り物はすべて、幸福を願って贈られるものであるが、この指環も同じ心で贈られるものだと付け加えている。

最後に彼の Rae に対する願いが、全体を引き締めて感動を盛り上げている。

Fly free and happy beyond birthdays and across forever, and we'll meet now and then when we wish, in the midst of the one celebration that never can end.

*the one celebration* とは毎年やって来る birthdays と違って、時の流れに左右されない永遠の時点とも言うべき意味合いである。

*that day* が来るというのは解脱することであり、*free* も同義に理解できる。そして BACH の求める *perfection* は *freedom* に通ずるが、彼にとっての *love* は人間的な愛というよりも、宇宙的な愛であり、永遠の真理と合一することであろう。

*There's No Such Place As Far Away* の構成は、前半と後半に分けて考えられるということの他に、飛行家らしい配慮が見られる。先ず四種類の鳥を考えると、ハチドリは barnstorming 向きの小型機、フクロウは夜間飛行用の計器を設けたもの、ワシは強力な馬力で高高度飛翔が可能な機、タカは強力かつ遠距離飛行に耐えるもの。

しかし RICHARD BACH の世界は宗教的詩的な approach によってのみ、伺い知ることのできる世界である。